

日本経済新聞八月十二日の日航機事故の記
事を読んで

西坂 詩乃

まず、この記事を読んで私の目から涙が込
み上げてきました。

今年二〇一五年は、終戦七十年の節目の年
であり、さまざまなメディアで戦争について
多く報道されています。しかし、終戦とは
別に、あの事故から三十年という節目の年で
もあるのです。

今から三十年前の八月十二日、日航ジャン
ボ機が御巣鷹の尾根に墜落。私が読んだ記事
は、この事故で父親を亡くした小沢さんとい
う男性のインタビューが載ったものです。小
沢さんは事故当時まだ母親のおなかの中にい
たため、一度も父に会ったことがないのだそ
うです。小沢さんの母、紀美さんは夫の遺
体確認の電話を受け、自分も死んで彼の元に
行きたいと何度も思っただろうです。その一女
を読んだときに、なんともいたたききれない気

持ちになり、涙が込み上げてきました。死にたいとまで思っていた紀美さんを元気づけたのは新しい命なのでした。小沢さんは今年一月に誕生日を迎え、父が七くなつた当時と同じ二十九歳になつたそうです。自分の親と同じ歳、それを超えていくという感覚は私には全く分かりません。どういう気持ちになるのでしょうか。うか。小沢さんは、父が生きられなかつた頃、一生懸命生きていと話しており、これからの人生をさらに大切に生きていくとい

うか強さのようなものを感じました。

この事故は三十年前に起きたものであり、今の若い人たちはまだ生まれていない時で、きざとです。そのため、若い人でこの事故を知らない人もいるのではないのでしょうか。実際に、小沢さんが大学生の時、複数の友人にこの事故の事を知らないと言われたそうです。小沢さんはこの事態にショックを受け、語り継がねばと決心したようですが、私もこういう事実にもつとむつとたくさんの人に知

てもらうべきだと思います。遺族にとっては
辛い過去であるけれど、伝えていかなければ
いつまでたっても飛行機事故はなくならない
と思うのです。最近では、小型飛行機が住宅
地に墜落するという事故があり、死者もでま
した。そんな事故は他人事。なんてことは思
わず、いつ自分の身にふりかかってくるかも
分かりません。少しでも危険が減るように、
空は安全だと思えるようになるためにも、日
航ジャンボ機墜落事故について知り、語り継
がれるべきだと思います。